**朱漆弓、黒漆矢、金沃懸地塗の矢立て**

この檀製の弓、羽のついた矢と装飾が施された2腰の矢立ては、鶴岡八幡宮の宝物の中でも最も古く、貴重なもののひとつです。朱漆弓は、2メートル近くの長さがあり、その両端には金銅の装飾、握り部分の下は彫刻で装飾されています。「胡簗（やなぐい）」と呼ばれる矢立ては、金粉を散りばめた漆の地（沃懸地）に、螺鈿（らでん）で杏の葉文様をあしらったもので、内側には矢を1本ずつ収納するための狭いポケットがそれぞれの矢立てに備わっています。黒塗矢30本のうち、13本は祭祀用の矢じりに「鏑」が付いた鏑矢、13本の矢じりは尖っており、4本の矢じりは丸みを帯びています。これらの矢は、厄除けや幸運を呼び寄せると考えられ、初詣に神社を訪れる参拝客に人気の破魔矢（魔除けの矢）の伝統の起源と言われています。

この弓道具一式は、京都の天皇に仕えた武将、源頼義（988–1075）が1063年に鎌倉に初めて八幡宮を創建したことと歴史的にも重要なつながりがあります。頼義は1051年、謀反を起こした武士を鎮圧するために東北地方に派遣されましたが、京都を出発する際に、源氏の守護神であり、武家の守護神である八幡神を祀る石清水八幡宮に参拝し、神の加護のしるしとして弓道具一式を授けられました。東北征伐に成功し、京都に帰る途中で鎌倉に立ち寄った頼義は、八幡神を祀る神社を創建し、2本の弓（1本は1807年の火事で焼失）、矢と矢立てを奉納して感謝の意を表しました。この弓道具一式は、頼義の子孫、源頼朝（1147～1199年）の創建後、鶴岡八幡宮に継承され、以来神社で大切に守られてきたものです。国宝に指定され、鎌倉国宝館に寄託されています。